

幼少期の被虐待体験と青年期の抑うつ症状との関連

— 緩衝要因としての Psychological Mindedness の検討 —

高 岸 幸 弘

The relationship between the experience of childhood abuse and depressive symptoms among adolescents: Mediating effects of psychological mindedness

Yukihiro Takagishi

(Received September 30, 2019)

Most people who have experienced abuse in their childhood experience a variety of symptoms in later years. Depressive symptoms in particular are common among many youths who have experienced abuse. However, certain factors can mitigate future depressive symptoms during the transition from childhood to youth. This study focused on psychological mindedness (PM) as a buffer factor for the relationship between abusive experience in childhood and depressive symptoms in youth, and explored the effect of PM on this relationship. A total of 291 university students (men = 88, women = 200, other gender = 3) completed a questionnaire containing items in abusive experiences in childhood, current depressive symptoms, and PM. The results of structural equation modeling showed that abusive experiences in childhood had a direct influence on future depressive symptoms. However, it was found that PM would mitigate the development of depressive symptoms in youth. Additionally, the result of a simultaneous multiple-group analysis indicated the effect gender difference had on the structure of the model and showed that the Interest factor of PM has a mitigating effect on depressive symptoms only among men. Thus, an intervention focusing on one's inner phenomenon and their interpretation can help reduce the development of depressive symptoms in future.

Key words : child abuse, university student, depressive symptom, psychological mindedness

I. 問題

幼少期の被虐待体験は生涯にわたってネガティブな影響を及ぼす。その影響は抑うつや不安といった精神症状の発現から、種々の身体症状、そして攻撃的な態度や反社会的行為といった行動による反応まで多様である (Fujiwara et al., 2010; Maniglio, 2009; 西澤, 2010; 坪井, 2005; 坪井・李, 2007)。中でも種々の精神症状は多くの被虐待経験者が共通して経験する深刻な反応のひとつである (Bradley et al., 2008; Silverman, Reinherz, & Giaconia, 1996)。特に、抑うつ症状は、幼少期や児童期のみならず、大学生など青年期にも慢性化して続くものとして問題視されている (Ross, Kaminskia, & Herrington, 2019; Wright, Crawford, & Del Castillo, 2009)。

虐待を受けるといったショックな体験がそのまま抑うつ症状の発現に影響することは想像に難くない。し

かしながら、幼少期から児童期、青年期といったプロセスの中でうつ症状が持続するという事実を踏まえると、ショックな体験の反応としてだけでなく、その後続く体験の処理過程が影響していることが考えられる。Ross ら (2019) は、大学生を対象に幼少期の被虐待体験と現在の抑うつ症状との関連を検証し、被虐待体験、特に心理的虐待と心理的ネグレクトが自己に対する恥を生じさせ、恥の感覚が抑うつ症状を説明していたことを見出している。恥と抑うつ症状といった、認知と情動のつながりは広く認知されており (Brewin, 2006)、中でも恥 (shame) は、激しく、その人に受け入れがたい感覚を生じさせ、劣等感や無力感が惹起し、それを隠蔽しようとする力が働くものであるため、より強烈に自己認知のメカニズムが作動するともいえる (Tangney, et al., 1996)。Wright ら (2009) も同様に、幼少期の被虐待体験が恥の感覚を媒介して大学生の抑うつ症状につながることを明らかにしているが、彼らは恥だけでなく、被虐待体験によって生じ

た無力感 (vulnerability to harm) のスキーマが、のちのうつ症状を説明することを報告している。被虐待体験による症状は PTSD の枠組みで説明されることが多いが、Wright らの報告は、PTSD の診断基準の一つである「否定的な認知の存在」とも一致する (APA, 2013)。恥であれ無力感であれ、それらが認知プロセスを経て抑うつ症状につながるパスがこれまでの研究でも一致した見解であることは明らかといえる。

被虐待体験をした場合、種々の社会資源が活用され、その悪影響が最小化されることは誰もが願うことであるが、実際はそのような援助資源につながらないことも少なくない。だが被虐待体験の後に援助資源が提供されなければ必ずしもすべてが破壊的な結果につながるわけではない。つまり児童期に虐待を受けた子ども全員が、その後心理的な問題に苦しむわけではなく、メタ分析によると、性的虐待の場合、21～49%の対象者がその後の症状を示していないことも報告されている (Kendall-Tackett et al., 1993)。児童虐待のその後の影響に関する研究報告の中には、被虐待体験の影響が緩和される要因について検討したのものもある。ストレス症状を緩和する構成概念として多くの研究で注目されているものがレジリエンスである (Rutter, 1985)。安藤ら (2017) は子ども時代の被虐待体験による将来の精神的不調を緩和する要因としてレジリエンスを取り上げ、文献レビューを報告している。安藤らによると、レジリエンスの症状発現に対する緩和効果は期待されると言われているが、症例数が少ないことと、その具体的なメカニズムは今後の課題であるとしている。レジリエンスは近年では適応のプロセスとして概念化されており、逆境体験をどのように認識して自己に内在化していくかが重要であるとされている (Egeland, Carlson, & Sroufe, 1993)。つまり、自己の内面に注目し、内側で生じる現象に肯定的な意味づけをする作業プロセスとも言えよう。

自己の内面で生じることがらに注目し、それらに意味づけしたりそこから洞察を得たりする傾向を Psychological Mindfulness (PM) という (Appelbaum, 1973)。最初に PM を定義づけしたのは Appelbaum (1973) であり、彼は PM を「自分の経験や行動の意味や原因を知る目的のために思考、感情、行動の間の関係性を理解する能力」とした。つまり PM をその人の能力の面から定義したといえるが、その後 PM は、能力の側面だけでなく、自己の内面に注意を向ける傾向を含んで捉える考え方が議論された (Hall, 1992)。近年では、パーソナリティの一部として自己内部へと注意を向ける心理的傾向と能力の両方が PM を構成していると理解されている。

PM はもともと臨床面接で把握され議論されてきた

構成概念であるため、その測定方法も構造化面接の分析から発展してきた (McCallum & Piper, 1990)。その他、精神分析としての構成概念の特徴から、心理投影検査法 (Wolitzky, & Reuben, 1974) や言語連想検査などから把握しようとするものもある (Dollinger, et al., 1985)。近年では、PM の能力的側面と、パーソナリティに起因する情緒や傾向の側面の両者に焦点を当てた測定尺度も開発されている (Conte, Ratto, & Karasu, 1996; Nyklíček, & Denollet, 2009)。測定尺度を用いた実証研究によって、PM は、抑うつ傾向と負の相関にあることが複数の研究で明らかにされている (Shill & Lumley, 2002; Takagishi, Uji, & Adachi, 2014; Trudeau & Reich, 1995)。ただ、そのメカニズムはもとより、PM という傾向あるいは能力の発達プロセスについても、現在研究が行われている段階にある。言い換えると PM に関する基礎データの蓄積が求められている状況とも言える。PM は再早期からの発達によって形成されることも共通認識されている (Beitel, & Cecero, 2003)。PM 発達のモデルは、主たる養育者と愛着形成をするプロセスで、他者の存在を認識し、自己の認識と内省が生まれる営みに端を発するとされている (Beitel, & Cecero, 2003)。自己を認識し、自己内省する能力や傾向はその養育過程で多様なものとなる。言い換えると多様な程度の PM が形成される。被虐待体験から抑うつ症状へと発展する際に、その症状が深刻になる場合もあれば、柔軟に乗り越えられる場合もあるのは、PM の程度によって処理過程が異なるのかもしれない。

そこで本研究では、この3つの要素 (被虐待体験、PM、抑うつ症状) の関連を検証する。特に PM が被虐待経験の保護要因として作用する可能性に注目する。PM が抑うつ症状を緩和することが明らかになれば、虐待体験のその後のケアのあり方がより明確になっていくことが期待できる。

II. 方法

1. 対象と実施方法

地方国立 A 大学の大学生を対象にアンケート調査を実施した。文系学部での心理学系必修授業の終了時に調査の目的を説明した上で、無記名による回答を求めた。アンケート用紙はその場で回収した。

325 名にアンケート用紙を配布し、欠損値が多くあったものと不参加の意志を示したものを除いた、有効回答 291 名 (男性 88 名、女性 200 名、性別未回答 3 名) 分のデータを解析した。

2. 測定尺度

(1) 被虐待体験: Child Abuse and Trauma Scale (CATS; Sanders & Becker-Lausen, 1995)

CATS は Sanders ら (1995) が作成した 5 件法 38 項目の自己記入式調査票である。身体的虐待体験 (項目例: あなたが予測もしない場面で、両親があなたを叩いたり、殴ったりしたことがありますか)、性的虐待体験 (項目例: あなたはこどものところに性的な体験をして今でも心の傷となっていますか)、心理的虐待・ネグレクト体験 (項目例: あなたの御両親はあなたを侮辱したり言葉で傷つくようなことをののしったりしましたか) の 3 下位尺度からなる。各下位因子を合計して使用されることもあり、それぞれ得点が高いほど、被虐待体験が多くあったことを示す。

本研究では、田辺ら (2006) の邦訳版を使用した。邦訳版も原版と同じ因子構造を示すことが明らかにされている。

(2) Psychological Mindedness (PM) : Balanced Index of Psychological Mindedness (BIPM; Nyklíček & Denollet, 2009)

BIPM は 14 項目 5 件法からなる自記式尺度で、自分の内部で生じている感情に注意を向けようとする Interest 因子 (項目例: 自分に何が必要か自分の感情から分かる) と、自分の内部での現象に関する洞察力・理解しようとする傾向を示す Insight 因子 (項目例: 自分の感情を意識していないことが多い※反転項目) の 2 下位因子からなる。得点が高いほど PM 傾向が高いことを示す。本研究では Takagishi (2018) の邦訳版を使用した。

(3) 抑うつ症状: Self-rating Depression Scale (SDS; Zung, 1965)

Zung (1965) は 20 項目 4 件法でうつ症状を測定する自記式尺度を作成した。この尺度は、抑うつ症状 (項目例: 気が沈んでゆううつだ) と身体症状 (項目例: ふだんよりも動悸がする) を測定するようになっている。信頼性と妥当性が確立されており、これまで多くの研究において使用されてきた。本研究では福田 (1973) の日本語版を使用した。

3. 統計解析

まず BIPM の因子分析を行ったのち、それぞれの測定尺度の記述統計および性差を確認した。その上で相関分析を行った。そして理論モデルに基づき、共分散構造分析を行った。さらに、性差によるモデルの違いを検証するため、多母集団同時解析を行った。共分散構造分析における適合度は Schermelleh-Engel ら (2003) の基準に基づき、 $GFI > 0.95$, $AGFI > 0.85$, $CFI > 0.95$, $RMSEA < 0.08$ を参照して判断した。

全ての統計解析は Statistical Package for Social Science (SPSS) 25 バージョンと AMOS 25 バージョンを使用した。

4. 倫理的配慮

調査への参加は自由意志であること、不参加によっていかなる不利益も受けないこと、解答中に途中で参加を取りやめることもできることを口頭で説明した。また、以上のことは質問紙の表紙にも記載した。その上で、アンケート調査に同意した者に回答を求めた。

III. 結果

1. BIPM の因子分析

BIPM の探索的因子分析は、BIPM 邦訳版の開発時の手続きと同様に、因子抽出法は主成分分析、回転はプロマックス回転を行った。その結果、2 因子が抽出された。それぞれの因子を構成する項目は、原版・邦訳版と同じ構成であることが確認された。そのため原版と同様に、自分の内面で生じる現象に関する洞察力や理解しようとする傾向を表している第 1 因子を Insight ($\alpha = .790$)、自分の内面で生じている感情に注意を向けようとする関心や傾向を表している第 2 因子を Interest ($\alpha = .782$) と命名して、以後の解析を行った (Table 1)。

2. 記述統計

全ての尺度の平均値及び標準偏差は Table 2 に示している。それぞれの得点において男女差を t 検定で検証したところ、Insight と抑うつ症状は女性の方が高く (それぞれ、 $t(286) = -2.17, p < .05$; $t(286) = -2.58, p < .05$)、Interest は男性の方が有意に高かった ($t(286) = -3.97, p < .001$)。被虐待体験は有意な差はみられなかった。この結果を踏まえ、共分散構造分析では多母集団同時解析で、男女別にモデルの差異を検証した。

3. 相関分析

全ての使用尺度の相関分析は Table 2 に示している。被虐待体験は Insight と弱い負の相関 ($r = -.218, p < .001$) が、そして抑うつ症状とは中程度の正の相関 ($r = .338, p < .001$) がみられた。抑うつ症状はまた、Insight と中程度の負の相関 ($r = -.419, p < .001$) がみられた。Interest は被虐待体験、抑うつ症状ともに相関はみられなかった (それぞれ $r = .142, r = .030$)。

Table 1 BIPM 因子分析結果

	Factor	
	Insight	Interest
6. I don't know what's going on inside me.	.801	.024
12. I can't make sense out of my feelings.	.693	.008
9. I am out of touch with my innermost feelings.	.628	-.059
1. I am often not aware of my feelings.	.600	.040
4. I guess I rarely listen to my feelings.	.593	-.059
3. Most of the time, I experience little or no emotion.	.470	-.039
10. I never think about what made me act in a certain way.	.391	.040
14. My deeper feeling is a good advisor.	-.028	.803
13. I love exploring my "inner" self.	-.020	.778
11. I am better off when being in touch with my feelings.	-.182	.613
8. My feelings show me what I need.	-.045	.521
2. My attitude and feelings about things fascinate me.	.193	.420
5. My negative feelings can teach me a lot about myself.	.243	.388
7. In the end you're better off when taking seriously also your negative feelings.	.187	.378
Cumulative percentage of explained variance (%)	.37	.41
Factor correlation	.282	

因子抽出法：主成分分析

回転法：プロマックス回転

Table 2 使用尺度の相関分析結果

	1	2	3	M	SD
1. 被虐待体験 ($\alpha = .907$)	-			74.7	17.5
2. Insight ($\alpha = .790$)	-.218***	-		20.0	5.1
3. Interest ($\alpha = .782$)	.142	.282***	-	12.2	5.4
4. 抑うつ症状 ($\alpha = .783$)	.338***	-.419***	.030	51.9	9.7

*** $p < .001$

4. 共分散構造分析

理論的枠組みに基づき、モデルはまず、被虐待体験をプロセスの開始（独立変数）とし、その後PMを媒介因子として配置した。そしてアウトカムとして抑うつ症状（従属変数）を設定した。InsightとInterestとの間には共分散を引いた。

(1) モデル全体の構造

有意でないパスを削除し解析していった。それぞれのパスモデルの適合度を比較しつつ解析を続けた結果、被虐待体験から抑うつ症状へ直接引かれたパスとInsightを媒介して抑うつ症状につながるパスが有意なモデルが最も良い適合度を示した。InsightとInterestの共分散は有意であったため、Interestもモデル図の中に含まれている。適合度はそれぞれ、GFI = .993, AGFI = .928, CFI = .983, RMSEA = .062であった。

(2) 多母集団同時解析

採用したパスモデルについて、男女グループにおける多母集団同時解析を行った。パラメーターに制約をかけたモデルと制約をかけなかったモデルとを比較した結果、制約をかけなかったモデルの方がよい適合度を示した（GFI = .942, AGFI = .899, CFI = .962, RMSEA = .060; GFI = .993, AGFI = .928, CFI = .983, RMSEA = .062）。このことによって、性差におけるモデルの異質性が示された。

女性ではInterestから抑うつにつながるパスは有意ではなかったが、男性では有意であった。結果はFigure 1に示している。

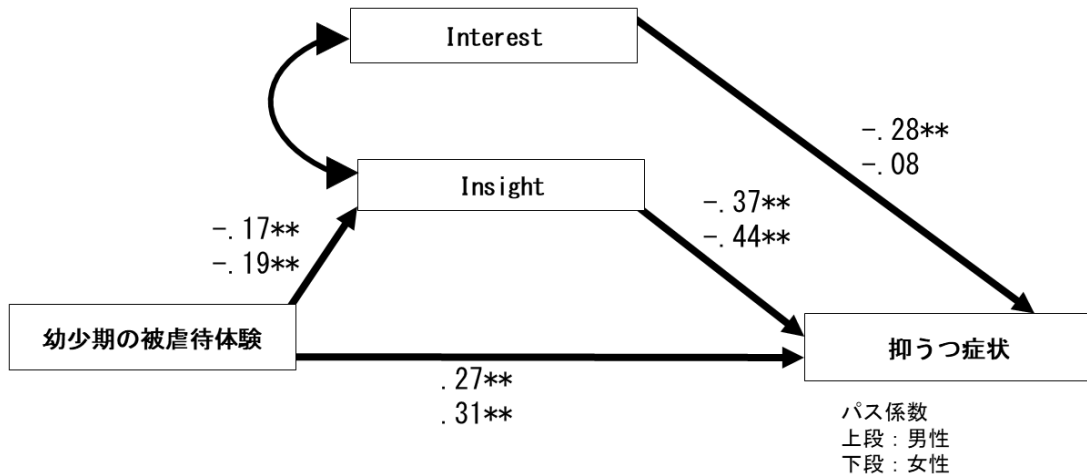


Figure 1 幼少期の被虐待体験がPMを媒介して抑うつ症状につながるモデル

IV. 考察

本研究では、大学生を対象に幼少期の被虐待体験が将来の抑うつ症状につながる影響を緩和する要因としてのPMの役割を検証した。共分散構造分析の結果、幼少期の被虐待体験からうつ症に対するパスが有意であったこと、さらに、Insightが両者を媒介してうつ症状へつながることが示された。これは、幼少期に被虐待体験をすると、将来の抑うつ症状発現につながりうることを意味する一方で、自分の内面で生じていることに関心を向け、生じてくる感情や思考の意味を理解していく傾向や能力を身につけることが、うつ症状発現の緩和につながる可能性が示唆されたということでもある。多母集団同時解析では性差によってモデルが異なり、男性においては、それだけでなく、内面にまず注目することそれ自体にもうつ症状の緩和効果がみられた。そもそも本研究の対象者の男性は、女性よりもInterestが高かった。この結果を踏まえると、被虐待体験という困難を抱えたとしても、将来のうつ症状の緩和のために、自分の内面に注目してゆくような態度を形成する介入が、有効である可能性があるといえよう。

うつ症状の発現に寄与する最も強い要因の一つとして反芻思考 (rumination) がある (Nolen-Hoeksema, Wisco, & Lyubomirsky, 2008)。反芻思考は自分の中に沸き起こる事がらに注目し、文字通り反芻してあれこれと考えを巡らすものである。PMも反芻同様、内面に注目し (Interest) それらに能動的に意味づけを試みる (Insight) 傾向である。しかしながら反芻とPMが決定的に異なるのは反芻が過去の失敗や将来の不安など、現在ではない瞬間にとらわれるのに対し、PM

は「現在」に生じる内面の現象に注目し、その現象の意味をとらえようと努力する点にある。それゆえ、先に述べた自己内面への注目の、被虐待体験ののちのうつ症状を緩和する効果の期待は、「現在」の自分の内面へ注目するというPMとしての介入となろう。この介入の理論的側面は、近年盛んにその効果が報告されているMindfulnessを活用したストレス低減介入の実践にも通じるものと思われる (Grossman et al., 2004)。Mindfulnessを活用した介入の実践の知見を活用しつつ、PMに基づく介入方法の開発は今後の課題だといえよう。

自己内面への注目ではなく、自己内面の構成概念が被虐待体験から抑うつにつながる関係を緩和するという報告をWuらが行っている (Wu et al., 2018)。Wuら (2018) は、自己に対する思いやり (self-compassion) や感謝の気持ちが、被虐待体験による将来の抑うつ症状を緩和することを見出したが、本研究の結果はWuらのこの報告にも関連する部分は大きいと考えられる。自分に対して思いやりを持ったり周りの人に感謝したりする態度は確かに抑うつ的ではない状態だろう。しかしながら、被虐待体験は自己の尊厳を低減させるだけでなく、周囲に対する感謝の気持ちを持つことを難しくさせるため、それらの保護要素が機能せず、被虐待体験が容易に抑うつ症状の発現へとつながりうる。一方、PMは自己に対する思いやりや感謝の気持ちを持つためのより根源的な段階でもある。PMが高いということは、より自己内面へ注目することであり、そこでの現象を受け入れることは、自己に対する思いやりにつながりうるものである。今後の研究は、PMからうつ症状の間をつなぐ別の要因を検討していくことも重要となろう。

本研究によって、幼少期に被虐待体験をしたとして

も、その後の成長の過程で、自己の内面に生じることに注意を向け、それらに意味づけすることで、将来の抑うつ症状が緩和される可能性が示唆されたことは重要であるものの、限界もある。まず、対象者は一つの大学の学生という点である。その点から結果がほかの対象者にも般化可能か判断するにはさまざまな対象者による検証を行う必要があり、今後の課題ともいえる。次に被虐待体験の測定が、大学生が現時点で幼少期を振り返り、自己評価したものであるという点である。被虐待体験の客観的な測定が困難なことは本研究に限ったことではないものの、本研究の示した被虐待体験が、あくまでも対象者の主観的な評価であることを踏まえて解釈されなければならない。

引用文献

- American Psychiatric Association. (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (DSM-5®)*. American Psychiatric Pub.
- 安藤絵美子・伊角彩・高岡昂太・小倉加奈子・先光毅士・福永宏隆. (2017). レジリエンスは子ども時代の虐待被害による将来の精神的不調を緩和するか：文献レビュー. *子どもの虐待とネグレクト*, 19, 257-262.
- Andrews, B., Qian, M., & Valentine, J. D. (2002). Predicting depressive symptoms with a new measure of shame: The Experience of Shame Scale. *British Journal of Clinical Psychology*, 41, 29-42.
- Appelbaum, S. A. (1973). Psychological-mindedness: Word, concept and essence. *International Journal of Psycho-Analysis*, 54, 35-46.
- Beitel, M., & Cecero, J. J. (2003). Predicting psychological mindedness from personality style and attachment security. *Journal of Clinical Psychology*, 59, 163-172.
- Bradley, R. G., Binder, E. B., Epstein, M. P., Tang, Y., Nair, H. P., Liu, W., & Stowe, Z. N. (2008). Influence of child abuse on adult depression: moderation by the corticotropin-releasing hormone receptor gene. *Archives of general psychiatry*, 65 (2), 190-200.
- Brewin, C. R. (2006). Understanding cognitive behaviour therapy: A retrieval competition account. *Behaviour research and therapy*, 44, 765-784.
- Conte, H. R., Ratto, R., & Karasu, T. B. (1996). The Psychological Mindedness Scale: Factor structure and relationship to outcome of psychotherapy. *Journal of Psychotherapy Research and Practice*, 5, 250-259.
- Dollinger, S. J., Greening, L., & Tylenda, B. (1985). Psychological - mindedness as "reading between the lines": Vigilance, locus of control, and sagacious judgment. *Journal of Personality*, 53, 603-625.
- Egeland, B., Carlson, E., & Sroufe, L. A. (1993). Resilience as process. *Development and psychopathology*, 5, 517-528.
- Fujiwara, T., Okuyama, M., Izumi, M., & Osada, Y. (2010). The impact of childhood abuse history and domestic violence on the mental health of women in Japan. *Child Abuse & Neglect*, 34 (4), 267-274.
- 福田一彦. (1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究. *精神神経学雑誌*, 75 (10), 673-679.
- Grossman, P., Niemann, L., Schmidt, S., & Walach, H. (2004). Mindfulness-based stress reduction and health benefits: A meta-analysis. *Journal of psychosomatic research*, 57, 35-43.
- Hall, J. A. (1992). Psychological mindedness: A conceptual model. *American Journal of Psychotherapy*, 46, 131-140.
- Kendall-Tackett, K. A., Williams, L. M., & Finkelhor, D. (1993). Impact of sexual abuse on children: a review and synthesis of recent empirical studies. *Psychological bulletin*, 113, 164.
- Maniglio, R. (2009). The impact of child sexual abuse on health: A systematic review of reviews. *Clinical psychology review*, 29 (7), 647-657.
- McCallum, M., & Piper, W. E. (1990). The Psychological Mindedness Assessment Procedure. *Psychological Assessment: a journal of consulting and clinical psychology*, 2, 412.
- 西澤哲 (2010). 子ども虐待. 講談社現代新書
- Nolen-Hoeksema, S., Wisco, B. E., & Lyubomirsky, S. (2008). Rethinking rumination. *Perspectives in Psychological Science*, 3, 400-424.
- Nyklíček, I., & Denollet, J. (2009). Development and evaluation of the Balanced Index of Psychological Mindedness (BIPM). *Psychological Assessment*, 21, 32-44.
- Ross, N. D., Kaminskia, P. L., & Herrington, R. (2019). From childhood emotional maltreatment to depressive symptoms in adulthood: The roles of self-compassion and shame. *Child Abuse and Neglect*, 92, 32-42.
- Rutter, M. (1985). Resilience in the face of adversity. *British Journal of Psychiatry*, 147, 598-611.
- Sanders, B., & Becker-Lausen, E. (1995). The measurement of psychological maltreatment: Early data on the child abuse and trauma scale. *Child Abuse & Neglect*, 19, 315-323.
- Schermelleh-Engel, K., Moosbrugger, H., & Müller, H. (2003). Evaluating the fit of structural equation models: Test of significance and descriptive goodness-of-fit measures. *Methods of Psychological Research Online*, 8, 23-74.
- Shill, M. A., & Lumley, M. A. (2002). The Psychological Mindedness Scale: Factor structure, convergent validity and gender in a non-psychiatric sample. *Psychology and Psychotherapy*, 75, 131-150.
- Silverman, A. B., Reinherz, H. Z., & Giaconia, R. M. (1996). The long-term sequelae of child and adolescent abuse: A longitudinal community study. *Child abuse & neglect*, 20 (8), 709-723.

- Takagishi, Y. (2018). Factor structure, validity, and reliability of the Japanese version of the Balanced Index of Psychological Mindedness (BIPM). *Japanese Psychological Research* (in print).
- Takagishi, Y., Uji, M., & Adachi, K. (2014). Examining the factor structure of the Psychological Mindedness Scale in the Japanese population through exploratory and confirmatory factor analyses. *Japanese Psychological Research*, 56, 201-209.
- 田辺肇・後藤和史・小澤幸世. (2006). Child Abuse and Trauma Scale (CATS) 日本語版の心理測定学的特性. 日本トラウマティックストレス学会.
- Tangney, J. P., Miller, R. S., Flicker, L., & Barlow, D. H. (1996). Are shame, guilt, and embarrassment distinct emotions? *Journal of personality and social psychology*, 70, 1256.
- Trudeau, K. J., & Reich, R. (1995). Correlates of psychological mindedness. *Personality and Individual Differences*, 19, 699-704.
- 坪井裕子. (2005). Child Behavior Checklist/4-18 (CBCL) による被虐待児の行動と情緒の特徴. *教育心理学研究*, 53 (1), 110-121.
- 坪井裕子・李明憲. (2007). 虐待を受けた子どもの自己評価と他者評価による行動と情緒の問題. *教育心理学研究*, 55 (3), 335-346.
- Wolitzky, D. L., & Reuben, R. (1974). Psychological mindedness. *Journal of Clinical Psychology*, 30, 26-30.
- Wright, M. O. D., Crawford, E., & Del Castillo, D. (2009). Childhood emotional maltreatment and later psychological distress among college students: The mediating role of maladaptive schemas. *Child abuse & neglect*, 33 (1), 59-68.
- Wu, Q., Chi, P., Lin, X., & Du, H. (2018). Child maltreatment and adult depressive symptoms: Roles of self-compassion and gratitude. *Child Abuse and Neglect*, 80, 62-69.
- Zung, W. W. K. (1965). A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, 12, 63-70.